

みる
観察

ゴジラの1954年

一般社団法人 北海道地域農業研究所

所 長 坂 下 明 彦

ゴジラと私は一九五四年一月三日生まれである。私はともかく、ゴジラは生誕七〇周年を迎える。

一九五四年はまだサンフランシスコ条約が結ばれてから三年、朝鮮戦争が休戦になったのが前年という移行期にあった。朝鮮戦争により一九五〇年に警察予備隊ができ、一九五一年の平和条約と一対の日米安保条約により、それが保安隊となった。そしてこの年、日米間のMSA (Mutual Security Act) 協定が締結され、これをもとに防衛二法（防衛庁設置法・自衛隊法）が成立し、再軍備が本格化していく。大きな節目の年となった。

MSAはアメリカの国内法であるが、それをもとに西側の援助が始まり、日米間の協定が締結されたのである。この協定は相互防衛援助協定を柱とするが、農産物購入協定、経済処置協定、投資保証協定もあわせて締結された。これによりアメリカの過剰農産物が大量に援助物資として流入し（一億ドル）、その国内販売代金（見返り資金）の七〇%が復興資金として使われることになる。その後も余剰農産物の流入は続き、小麦などの基盤が破壊されるのである。

これとリンクして、ゴジラが生まれた一九五四年には学校給食法が制定される。

学校給食は一九四六年の首都圏の学校から始まり、都市部から全国へと波及するのは一九五二年である。その原資はララ物資やガリオア資金であった。これらは、戦後直後の食糧難に対する緊急支援的要素が強かった。学校給食法は、全国の学校での給食の完全実施を推進するとともに、MSA協定に基づくアメリカ余剰農産物の輸入とその定着化に寄与していく。厚生省は栄養改善法を制定、栄養改善運動を展開する。一九五五年には日本食生活協会ができ、小麦消費拡大運動が組織的に展開され、キッチンカー（栄養改善車）が全国を走り回るのである。

慶応大学の生理学教室の教授である林 謙（たかし）氏は、ベストセラーになったカップブックスで次のように述べている。「親たちが白米で子供を育てると、その子供の頭脳の働きが鈍くなる。せめて子供の主食だけはパンにした方がよい。大人もと主張したいが、米を食うなど言えば血の雨が降る。」（概要）。一九五八年

の本だが、今なら首が飛ぶような発言である（注1）。

このように、戦後の日本は再軍備と食生活の「改善」というアメリカの迷惑のもとで、一九五五年には高度経済成長を迎えることになる。しかし、曲がりなりにも形成された民主国家のもとで、大きな核の傘の中で沈黙を強いられてきた広島・長崎の原爆体験を起点とする平和運動が沸き上がる。その象徴としてゴジラが登場する。

一九五四年三月、ビキニ環礁で水爆の実験が行われた。被爆被害が大きかったことはかなり後になって明らかにしたが、当時の衝撃は第五福竜丸の被災にあったことは言うまでもない。そのタイミングで上映されたのが「ゴジラ」。「狂奔する悪魔兵器水爆実験によって二百万年前の怪獣が眠りをさまされた！ 身長九ビル大、体重三千吨、怪白光を発し、口からはすべてを焼き尽くす放射能を吐く！ 大東京は阿鼻叫喚」（写真）。一月三日が

封切りであり、ゴジラの誕生日となった。

道新の「思想性持つ空想映画」というコラムは「ゴジラはビキニ・マグロや放射能雨などの象徴とも。全人類の悲願にアカンベエをして水爆実験が続けられれば、放射能雨以上の恐怖すべき出来事が起り、全人類が死滅するかもしれない」という風刺でもある」と評論している。映画が平和運動を後押ししたのである。一九五五年には原水協が生まれるが、「いかなる」問題で運動は危機に陥るが、大江健三郎の『ヒロシマノート』（岩波新書、一九六五）はみんなの胸を打った。さて、そのゴジラだが、私が実際見たときには、モスラが登場し怪獣映画も核を意識しつつファンタジー化していた。キングギドラが現れるに至っては地球防衛軍の英雄に祭り上げられている。性懲りもなくメカゴジラの逆襲なども見たが、ハリウッドの爬虫類映画が出るに及んで、ゴジラ鑑賞はやめてしまった。

一九五四年は天変地異も著しかった。



洞爺丸台風はわが家の炭鉱住宅のトイシの屋根を吹き飛ばし、洞爺丸の悲劇を生んだ。ここから青函トンネル構想が生まれ、北海道新幹線計画へと推移したが、未だ札幌延伸は実現を見ていない。また、この「風台風」は全道の森林をなぎ倒し、風倒木被害は森林の五割に及ぶという未曾有のものとなった。その処理には途方もない年月を要した。

前年の冷害に続き、農業は一九五四年も冷害と台風により深刻な被害を受け、前年の二四〇億円を上回る三七〇億円に達した。ここから北海道独自の農家負債対策が始まり、一九五六年の連続冷害を経て寒地農業確立運動が開始される。北海道独自の農業振興対策を国に求めるものであり、一九五八年のマル寒法（北海道寒冷地畑作営農改善資金融通臨時処置法）に結実する。北海道の畑作地域を対象に、営農改善計画にもとづいて農林公庫から資金供給するものであり、道単独の長期低金融制度が成立したのである。

「北海道農政」の戦後の出発点となったと評価される（注2）。

畑作地域の振興と並行して、酪農振興もこの時期の大きな課題であった。その政策的な画期となったのが一九五四年の酪農振興法と集約酪農地域の指定である。それまでの副業酪農から特定の地域に酪農を集約して産地化をはかり、集乳の合理化を実現するというものであり、戦後の酪農振興の出発点となった。乳牛の導入に当たっては世界銀行などの思惑もあり、ニュージーランドから輸入したジャージー牛にブルセラ病が発生するという混乱も生じた。一九五五年には根釧パイロットファーム事業が開始され、酪農の規模拡大の端緒となっていく（注3）。

農協にとっても一九五四年は大きな節目となった。戦後の経営危機は続いていたが、一九五三年の整促法（農林漁業組合連合会整備促進法）により系統の事業利用における整促体制が成立する。また、戦前の農会系統と産業組合系統の統

合をめぐる農業団体再編問題にも決着がつき、農協中央会体制として整備されたのが、この年の農協法改正であった。

このように、北海道農業にとっても、一九五四年という年は、戦後から高度経済成長へと向かう結節点であったということができるのである。

ゴジラ誕生から七〇年、被爆国日本は核兵器禁止条約の批准に手をこまねいており、長崎の被爆体験者訴訟での国の姿勢をみても被爆者認定すら決着を見ていない。ゴジラが深海で再び安らかな眠りにつくには、まだまだ時間がかかりそうである。

（注1）林 麟『頭脳―本能を引き出す処方箋』光文社、一九五八。

（注2）『戦後北海道農政史』北海道農業会議、一九七六。

（注3）坂下明彦「北海道農地開発協会とまぼろしの道農地開発公社―一九五四―五五年の攻防―」『北海道史への扉』第2号、二〇二一。